

## 『万安方』所引の『可用方』について

郭 秀梅

順天堂大学医学部医史学研究室／北里大学東洋医学総合研究所 医史学研究所

梶原性全（1266～1337）の『万安方』は鎌倉時代を代表する漢文の医学全書で、初稿50巻は1315年ごろ、最終稿は1327年に成立した。のち性全の他の単行書が後付され、62巻の現行本となった。目次は隋の『諸病源候論』、主内容は北宋の『聖濟総録』に依拠する。ほかに唐代、とくに宋版医書を多数利用、引用書名と人名を明記し、自らの経験も随所に記す。これを集計すると、全巻に331書・計3773回の引用があり、うち非医書が55種、和書が3種あった。人名は279名・計1912回の引用におよぶ。以上のうち249回も引用された中国佚書の『可用方』が注目された。本書は歴代の著録がなく、関連研究もなく、書名さえ斯界に知られていない。そこで調査・検討したところ、以下の諸点を明らかにした。

中国における『可用方』の引用は『全生指迷方』に1回、『永楽大典・医薬集』に4回あった。両書は散佚した明代『永楽大典』からの輯佚ゆえ、『万安方』の249回は圧倒的といえる。その引用回数と内容、性全が200部あまりの書を披見したと記す点から、『可用方』はかれの手元にあったに相違ない。つまり当時すでに日本に輸入されていたと推測できる。

『万安方』は『可用方』についてこう記す。巻13下に「私云。諸膈病源並薬方、『聖濟録』並『可用方』第十卷、『究原方』八九卷、及『衛生良剂方』中広出之、可看勘彼等」、巻23に「私云。……今日本医者不看方書、只率胸臆、……須看『聖濟録』第百三十五卷、及『可用方』第七卷」、巻32に「又『聖濟録』及『可用方』有衆多良方、普可引用。凡『可用方』從第二十七卷至第三十卷、四個卷、論於婦人諸疾及妊娠將産、産後百病」、と。すると『可用方』は全30巻、あるいは30巻以上の大部な方書だった。佚文には『諸病源候論』『千金方』『外台秘要』も引用されるので、唐代以後の成立は間違いない。処方には散剤を調服し、『聖濟総録』に類似内容があるので、両書の成立年代は近いだろう。

著者については資料が乏しいためか、誤解も生じていた。『万安方』第14巻下・巻15・巻24は「『可用方』森立夫曰」と明記し、ほかに性全は「予（森立夫）家施人秘方、用広伝之」と「予」に「森立夫」の小字注をつけている。性全は『可用方』の著者を森立夫と推定したらしい。他方、『永楽大典・医薬集』には「柳森『可用方』」の記述が4ヶ所ある。いったい柳森と森立夫にいかなる関係があるのか。私は下記の資料から明らかにすることができた。

元・黄潛『文献集』巻3に柳立夫伝が載る。「柳立夫者、名森、当塗人也。祖父世医、至立夫遂以其技知名。立夫於医学、善為脉、其治疾决人生死、多奇驗。……立夫後以高寿終。……以予所聞、立夫為人已疾、其治驗甚衆。而立夫所著有『診脉図』、有『可用方』、今江淮間類多襲用其書」、と。この伝は柳立夫の人柄および交友を詳細に記し、黄潛の父が立夫と親しく、弟と称したらしいことも分かる。一方、明・陶安「題柳如庵小影」には柳森像への画賛がこう載る。「如庵神医妙天下、後來安有如翁者。我恨生晚不識翁、形神已落丹青写。……六丁下取『可用方』、造化茫茫入吾把、その注に「当塗之黄池人、宋神医也、有『可用方』行於世」、と。

よって『可用方』の著者は姓が柳、名を森、字を立夫といい、如庵と号したこと。当塗黄池（現安徽省）出身の南宋人で、代々の医家だったこと。『診脉図』と『可用方』を撰述し、江淮間でかなり影響のあったことが知られた。

しかし不審点もある。第1は、性全がなぜ「柳」を見落とし、名と字をかきねて森立夫と称したか。第2は、『可用方』が三十巻以上の大部な方書にもかかわらず、中国後世への影響が薄弱だったこと。第3は、性全の利用した『可用方』が現存していてもいいが、見いだせないことである。それゆえ『可用方』には調査の余地がまだあり、これらペールを取りさることが今後の課題といえよう。